令和５年度

一般選抜（Ⅰ期）問題

試験日　２月１日

国　　語

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

注意事項

① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
② 開始の合図後、解答用紙に「氏名」、「個人番号」を記入すること。
③ 受験票、筆記用具以外は、机上に置かないこと。
④ 受験票は机上に貼付してある「個人番号」の手前に置くこと。
⑤ 記述解答で、字数の指定がある問題では句読点は１字として数えること。
⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
⑦ 試験中は退席しないこと。（気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること）
⑧ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

多くの人は、暴力や差別は知識ではなく「良心」や「道徳」で防ぐものだ、というイメージを持っています。暴力や差別は他者への悪意を持つ人がおこなうものなので、悪意を持たないようにする・させることが重要だと考えているのです。もっと簡単な表現を用いれば、暴力や差別は「悪い人」がすることなので、みんなが「よい人」になればよい、と思っているわけです。たしかに、小学校や中学校で「差別をなくすために、他者に対する思いやりのある人になりましょう」と教育されることはあっても、「差別をなくすために、(a)カシコイ人間になりましょう」とはほとんど言われません。ということはやはり暴力や差別の解消に必要なのは、「良心」や「道徳」であって、知識ではないのでしょうか？

この問いに答えるために、「オネエキャラ」をめぐる私の授業の受講生の反応をとりあげます。「良心」や「道徳」を育むことに依存して(1)「普通」という暴力を解決しようとすることは、不十分であったり意味がなかったりするだけではなく、時に逆効果でもあることが明らかになるはずです。

二〇一七年現在、テレビを中心としたメディアの中で「オネエキャラ」が一定の存在感を放っていることを、受講生のほとんどが好意的に捉えています（私の授業を消極的にであれ「好んで」履修している学生が多いので、当然といえば当然ですが）。「オネエキャラ」の存在感がセクシュアルマイノリティへの差別を減らすと期待している学生も多くいます。

もちろん多くの学生は、そのような「キャラクター」がメディアの中でからかいの対象となっていることにも気づいており、視聴者の差別意識を助長しかねないこともキグ(b)しています。期末試験で「オネエキャラ」ブームの「功罪」について出題した際も、多くの学生は(2)差別に関する両義的な側面を上手く指摘していました。

一方で、自分の持つ好意に対して「「オネエ」は才能やセンスがあるから好感が持てる」という理由づけをしている

学生が多くいました。これはかなりの問題です。たしかに、メディアに現れる「オネエキャラ」は、ファッションやメイク、フラワーアレンジメントやダンス、あるいは話術などの一芸にヒイデタ(c)人々が多いのは事実ですし、その才能やセンスの素晴らしさは、視聴するセクシュアルマイノリティ当事者（とくに若者など、アイデンティティの自己肯定の機会が奪われやすい人々）を自己卑下から救うことができるかもしれません。しかし、あれほどまでに才能にひいでていないと「受け入れられず」、さらにそれでもからかいの対象になってしまうとすれば、高水準の才能やセンスを持たない大多数のセクシュアルマイノリティは、むしろ自らがただ全面的にからかわれ差別される対象でしかない、と確信してしまうこともありえます。

当たり前のことですが、「オネエ」だから高水準の才能やセンスがあるのではありません。[A]、「「オネエ」は才能やセンスがあるから好感が持てる」は、才能やセンスのない「オネエ」には好感が持てません、と宣言しているにすぎません。セクシュアルマイノリティに対する差別の根強い社会においては、表向きの好感とその背後の偏見の落差は、具体的なセクシュアルマイノリティの当事者に対する差別の解消に役立つことはほとんどなく、場合によってはさらに傷つけかねません。なぜなら、このような人々は「オネエ」を褒めているようで結局「オネエ」は「普通」ではない、ということを繰り返し述べているにすぎないからです。「普通」という暴力は少しも解除されていません。

実際、セクシュアルマイノリティ当事者の中には、このような才能とセンスの押しつけに嫌気がさしている人も多く存在します。例えば、「オネエはセンスがあるのでそういう友達がほしい」という理由で誰かが近づいてきたら、「私を利用する気満々のあなたに差し出してやるセンスなどない」と拒絶したくなるものです。実は「オネエ（あるいはセクシュアルマイノリティ）はセンスがあるので、そういう人と友達になるため」という理由で私の授業を受講する学生も稀にいるのです。そういう人には「授業にそんなことを期待すべきではなく、またそもそもマイノリティはあなたの人生を豊かに彩るアクセサリーではない」ときつくサトス(d)ことにしています。「アクセサリー」扱いはそもそも相手を対

等な人間として見ていない差別的なふるまいだからです。男性が妻のミリョク(e)を自らの高いステイタスゆえの「戦利品」だとみなしモノのように自慢すること（「トロフィーワイフ」と呼ばれます）に、私たちはもう十分辟易しているはずです。それと同型の「モノ」扱いをセクシュアルマイノリティに対しておこなうことも、また許されるはずがありません。

ただし、ここで私は、「オネエ」あるいはセクシュアルマイノリティは、［B］と同じ「普通」の人々である、と指摘したいわけではありません。マイノリティも［B］と同じく「普通」の人々であるから差別してはいけない、という論理は、「普通」でないなら差別をしてもよい、の言い換えに過ぎないからです。

むしろ重要なのは、「普通であるか否か」を判断し、そこに意味づけをするのが［B］の側、という事態そのものが不当なのだという認識です。「普通じゃないから好感が持てる」も、「普通だから好感が持てる」も、意味づけが一方的である点で「［C］見下してもよい」「［D］見下してもよい」と大差ないのです。

（森山至貴『ＬＧＢＴを読みとく―クィア・スタディーズ入門』による）

問１　傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字に直しなさい。その際、送り仮名が必要なものは送り仮名も平仮名で書きなさい。

問２　空欄［A］に入る最も適当な語句を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　ですが　　イ　たとえば　　ウ　その上　　エ　ですから

問3　空欄［B］に入る「マイノリティ」の対義語を片仮名六字で答えなさい。

問4　空欄［C］・［D］に入る内容として適当なものを次のア～エの中から二つ選び、記号で答えなさい。（順不同）

ア　普通じゃないから　　イ　普通に過ぎないから　　ウ　普通にしていれば　　エ　普通に誰でも

問5　傍線部(1)「「普通」という暴力」とはどのようなものか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　社会の想定する常識や通念を他人に押し付け、望まない生き方を強いること

イ　画一的で何の特徴もない人を、からかいや排除の対象にすること

ウ　自分と異なる人を高く評価するように見せかけて、内心で否定すること

エ　マイノリティという普通の人々を、人間ではなくモノのように扱うこと

問6　傍線部(2)「差別に関する両義的な側面」について、ここで言う「両義的な側面」とはどのようなものか。「～側面」に続くかたちで、二つに分けて答えなさい。

問7　本文の内容と一致するものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　マイノリティへの差別を解消するためには正しい理解や知識こそが重要なのであり、良心や道徳は無意味である。

イ　「オネエキャラ」の影響力が差別の解消に役立つことはほぼ無く、「オネエキャラ」への好感はかえって当事者を傷つける。

ウ　社会の中で一方的に形作られる価値観が、そもそもマイノリティに対して抑圧的であることを知る必要がある。

エ　マイノリティを「アクセサリー」扱いするような風潮を無くすには、まず他者への配慮やシンパシーを養わなければならない。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本人は言語だけでなく実は日本という国の存在にたいしても、同様の安心感を意識下の深いところで感じていると私は思っている。この「自分たちの言語、そして国が絶対に無くなるようなことはない」という日本人が今でも抱いている無意識の確信を、私は不沈戦艦幻想と呼んでいる。なぜ幻想と呼ぶのか。それは日本が不沈戦艦だという確信は、日本が古来置かれてきた環境条件が続いている限り正しかったが、その条件がすっかり変わってしまった現在でも、まだ不沈だと思っているからである。事実これまでの日本は、対外的に言語を駆使して国を守る必要があまりなかった。しかし強力な言語力という護衛戦闘機群なしで、現在のように情報宣伝力が全てに優先する国際化時代を生き抜くことは、いかに日本が巨大な戦艦であっても絶対に不可能である。このことは大艦巨砲主義という時代遅れの幻想の産物であり、そして二十世紀前半の世界で最強を誇った巨大戦艦「大和」が、味方航空機の援護を得られなかったために、三百数十機もの米軍機による集中攻撃にさらされ、あえなく撃沈された史実が良く示している。

さて日本人が歴史上最初に真剣に取り組まなければならなかった外国語は古代中国語である。日本人は古代中国との接触を深めるにつれて、日本語とは系統もタイプも全く異なる中国の言語を、ただ単に外交上の必要や、優れた文化や進んだ学問技術を取り入れるための不可欠な手段として懸命に学んだだけでなく、同時に漢字という文字をうまく利用して自分たちの日本語を表記するという工夫も行った。そしてさらに漢字から仮名という音節文字をも作りだし、これを漢字と混ぜて用いるようになった。[A] もともと外国語である漢字に、訓[(1)]という形で日本語を対応させることによって、異言語のもつ高等で抽象的[(a)]な概念を、曲りなりではあっても消化吸収し易くすることにも成功したのである。

しかしこのような古代中国と日本との接触の実態をよく見ると、それは当初から千数百年後の幕末にいたるまで、もっぱら日本が相手から取り入れたいものは文字であろうと文化であろうとすべて取り入れて、それを土着既存の言語

や文化、そして各種の技術と巧みに融合させることに終始していた。つまり古代中国と日本の接触とは大筋では日本が多大の影響（恩恵？）を、主として言葉（文献）を通して一方的に受けただけであって、日本の文化文明が相手にはほとんど影響を与えてはいないことが分かるのである。当時の日本人の中に、こちらが日本語によって中国に何かしらの影響をあたえようなどと考えた人が一人でもいただろうか。私はこのような接触形態は、多くの人がなんとなく思っている文化交流ではなくて、実態は向こうからこちらへの(2)文化直流に過ぎないと考えている。

歴史上小さな文明と大文明が接触した例は数多く知られているが、ほとんどの場合弱くて小さな方が強力な文明に吸収され消滅してしまうものである。だがなぜか劣等でしかも弱小な日本は古代中国に吸収されなかった。また吸収された弱小民族の文化は、しばしばそれなりの影響を大文明に残したうえで消えていくことが知られている。[B]近世において中国大陸では明国が満州族によって倒され清国が誕生した。辺境の騎馬民族であった満州人は武力こそ強かったが文明度においては漢民族に(b)比肩するものではなかったため、彼らの文化はやがて漢文明に吸収され埋没してゆくが、それでも辮髪（べんぱつ）や乗馬をこととする人々に特有の、裾（すそ）に切れ目の入ったいわゆる「支那服」などに見られるような様々な影響を漢文明に残したのである。ところが日本と中国の場合は千数百年もの長い接触があったにもかかわらず、弱い日本は吸収もされなかったが、同時に小さな文明である日本の影響は強い漢文明のどこにも見られなかった。[C]広汎な影響を受けた小さな日本が吸収もされず、さりとて相手に何らの見るべき痕跡も残さなかったのはどうしてだろうか。

米国の歴史学者ハンチントンは『文明の衝突』などの著作の中で韓国、ベトナム、チベットなどの文明を、巨視的には中華文明圏の周辺的な部分を構成するものと考え、これらを含む全体を一つの大きなまとまりとして、ヨーロッパやインドなどの他の大文明と対比させた。[D]日本だけは、中華文明の強力な影響を大幅に受けたことが歴然としているにもかかわらず、その一部とは見なさずに、小さいながらもそれ自体独自の完結した一個の文明としている。

この見方は私の年来の主張と合致するものであるが、そこに至る私の分析の結論を簡単に言えば、日本が大陸と地続きではない島国だったからということが大きい。[E]島国であったというだけでは全てを説明できないことは、同じく大陸から切り離されている島国のイギリスが、独自の文明を形成せずヨーロッパ文明の一構成員に止まっていることからも明らかであろう。小さな島国でありながら日本が独自の文明を作ることが出来たのは、日本と大陸を隔てる海の性質が日本にとってまことに都合の良いものだったからである。

イギリスと大陸を分かつドーバー海峡は幅が僅か四十キロしかなく、海が平穏の時には女性でも泳いで渡ることが出来る。そこで歴史が示すように大陸から何度となく、様々な文化や言語をもったいろいろな民族が侵入したため、イギリスの文明はその結果として、基本的にはヨーロッパ文明の一部でしかないことになった。これに反してユーラシア大陸と日本との距離は最も短い対馬海峡においても、中間にある対馬をはさむ東西両水道の合計は約百キロもあり、しかも海流が強く海が荒い。また東シナ海を船で渡るとなれば距離は何倍にもなる。したがってこのような海を天候の予測がつきにくかった時代に、昔の船で行き来することは至難の(c)業であって、だから日本からの遣隋遣唐使もたびたび難破して使命を果たせなかったし、二度にわたる元の日本侵寇も失敗に終わったわけである。

このように随意気侭な航行を許さなかった海のおかげで、日本は長い間こちらの欲しいものだけを大陸から取り入れ、都合の悪いもの日本にとって困るものは、取り入れずまた影響もうけないで済むという、強大な中華文明を自分の好みでつまみ食い、つまり良いところだけを自由選択できたという、世界の歴史に例のない恵まれた立場に置かれていたのである。私が大陸と日本を隔てる海が、特定のものしか通過できない半透膜の役を果たしたと言ってきたのはこの意味である。要するに、大陸からの計画的な侵略や異民族の大集団が渡来してくることは難しいが、時たま運がよければ日本の遣隋遣唐使の船が、こちらにはない大陸の進んだ文物、優れた技術などをもたらしてくれるから、それを基にして遅れた日本をあらゆる面で改革改造し、国内を発展させることが出来たのである。

もし外国の文化文明が直接の征服によって日本に強制されたならば、良いもの欲しいものも入っては来るだろうが、同時に困ったもの嫌なことを押し付けられても拒否できない。また大陸と地続きであれば、それこそ否応(d)なしに大量の異民族が流入してくるから、この場合でも異文化の力で圧倒され、こちら側の取捨選択の自由は奪われてしまうことになる。

このような否定的で破壊的な経験をせずに済んだ日本人の外国体験を比喩的に言えば、(3)日本人は外国というものを、こちらから出向いて、あれこれと欲しいものだけを漁ることのできる、素晴しい宝の山積みされた宝物殿だと思い込むことが許された、例外的に幸福な民族だということができよう。何しろ外国から直接酷(e)い目にあわされることもなく、そしてもたらされるものといえば、それはすべてこちらの必要と好みで選ばれているから、外国の嫌なところ、悪いもの困ったところは一切目に入らず、そのため相手に反発したり憎んだりする気持が全く生まれないで済む。だから外国を極度に美化理想化できたのである。私は日本人が抱く、外国をこの世の楽園、理想郷と思い込んで憧れるこの心理を、地上ユートピア主義と名付けている。

元来ユートピアとはそのギリシャ語の語源が示すように「どこにもない場所」、つまり天国でならいざ知らず地上にはあり得ないものなのである。したがって「地上のユートピア」という言葉は矛盾を含む概念なのだが、外国の怖さ酷さを半透膜のおかげで経験せずに済んだ日本人にだけは、それがいつも海の彼方にある特定の外国という形で存在し続けたからである。このような外国観は「海の向こうからは良いものが来たためしがない」という諺をもつアラブ人には全く理解出来ないものと言える。

（鈴木孝夫『新　武器としてのことば―日本の「言語戦略」を考える』による）

問1　傍線部(a)～(e)の漢字の読みを平仮名で答えなさい。

問2　空欄 A ～ E に入る最も適当な語句を次のア～キの中から選び、記号で答えなさい。ただし、同一の記号は一度しか使えないものとする。

ア　もちろん　　イ　このように　　ウ　たとえば　　エ　その上

オ　あるいは　　カ　しかし　　キ　したがって

問3　傍線部(1)「訓」とあるが、次の①～⑨の中から「訓読み」の語を三つ、「重箱読み」の語を二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。なお、いずれも記号は番号の小さい順に記すこと。

①　魚卵（ぎょらん）　②　泥靴（どろぐつ）　③　答申（とうしん）

④　奥歯（おくば）　⑤　敷金（しききん）　⑥　本屋（ほんや）

⑦　相場（そうば）　⑧　図面（ずめん）　⑨　黒帯（くろおび）

問4　傍線部(2)「文化直流」とは何か。本文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

問5　傍線部(3)「日本人は外国というものを～例外的に幸福な民族だ」とあるが、ここに示された日本人の考え方を、筆者はどのように表現しているか。本文中より十字以内で抜き出し、答えなさい。

問6　本文の内容と異なるものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　日本文化は、接触した大文明に吸収されなかったが、これは歴史上稀有なことである。

イ　ドーバー海峡は、文化的には半透膜の役目を果たしてきたと言える。

ウ　日本人は日本語が消滅することはないという安心感に胡坐をかいている。

エ　弱小民族の文化が消滅する際、吸収した側の大文明に影響を残すことが多い。

オ　隣接する大文明と日本の自然環境の双方が、日本文化の形成には重要であった。